

二〇二三年度

沖縄大学 一般選抜（中期）

「国語」

沖縄大学 二〇二三年度 一般選抜 (中期)

国語

※答えはすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

インターネットを通して世界的な反戦運動が広がった背景には、九・一一事件の遺族がニューヨークのデモに参加していた事実①に②シヨウチヨウされるように、「人を殺したくないし、殺されたくもない」と言う根源的な人間の尊厳を守る気持ち③が共有されていたからだと言われている。【 A 】アメリカのイラク攻撃に対し反対していたフランスやドイツの反戦運動の背景には、過去の世界大戦の反省が色濃く投影されている点が指摘されている。

鶴見俊輔氏が強調している論点も、戦争反対の根拠を理論ではなく、日々の生活の延長線上にある「殺されたくない」と言うことを根拠にするあり方であった。鶴見氏は、昭和戦前期に④オモテブタイで国民に向かって戦意を⑤鼓舞する演説を行っていた歌人の土岐善麿と、日々の生活のため台所で乏しい材料から別の現状認識を保っていた妻との違いについて述べている。そして、自分の生活のなかに根をもたない「理論は、戦争反対の姿勢を長期間にわたって支えるものではない」く、妻／女性たちにおける日々の生活に根ざした「無言の姿勢」のなかにある平和運動の根の重要性を強調し、その延長線上にある「殺されたくない」と言う点に戦争反対の根拠を求めていることを主張している。さらに、「イラクでは、女性、子供、そして戦闘力のない老人が殺される。そのことは、アジアの中で大きな富と武力をもつかつての日本が、アジアに対してしたことを思わせる。これに反対する運動は、新しい形を必要とする」と述べている。

この鶴見氏の文章は多くのことを④喚起する。生活に根ざした平和運動の根、「殺されたくない」と言う戦争反対の根拠、そして戦闘力のない女性や子ども、老人の立場から見える視野、さらに日本に侵略されたアジアの視点など重要な論点が提出されている。

【 B 】、そのような視点から考えることで、いかに戦争に反対する新しい形の運動を構築できるかが問われている。以下、それらの問題を、沖縄の現在に照らしながら考えてみたい。

沖縄では九・一一事件直後から⑤チウリユウ米軍の警戒態勢がとられ、基地周辺では厳重な警備が行なわれた。その際に米軍が発令した警戒態勢のレベルは、「コンディション・デルタ」で、それは最高度の警戒態勢を意味するものだった。夜半に九・一一事件を報じるテレビ映像に最初に接したとき、嘉手納基地に近接した場所に住んでいる私を⑥オソつたのは、やはりその嘉手納基地があるがゆえの不安と恐怖であった。それは、もしかすると嘉

手納基地が「標的」になるかもしれないという不安と怖れだった。そんな感情に揺れながら、繰り返し報じられる、旅客機がツイン・タワーに突入してビルが⑦崩落するシーンを、焦点の定まらぬまま何度も見ていたことを今でも思い出す。私の不安を裏うちするように、その翌日から嘉手納基地では、機関銃をもった数名の米軍兵士がゲートごとに常駐警備して⑧ケンモンを行なうようになり、場所によっては戦車に乗った兵士が警戒態勢をとる状況に劇的に変化した。その後、本土から派遣され拳銃を携帯した日本の警察官が、その米軍兵士を⑨ホサするため警備に当たることになり、嘉手納基地では、米軍兵士が基地の警戒警備のため、フェンスの内側から沖縄住民が住んでいる方向に銃口を向け、ゲート前では日本の警官たちが拳銃を携帯して警備態勢をとるようになったのである。

それらの米軍基地の警戒態勢を見たとき、その不安や恐怖感とともに、いったい彼らは誰から何を守るために、そのような警戒態勢をとっているのかと考えざるをえなかった。米軍基地を守るためフェンスの内側から米兵に銃口を向けられた沖縄の私たちは、果たして守られる側にいたのだろうか。沖縄住民の方向に銃口を向ける米軍兵士たちの姿から、沖縄戦体験者の少なくない人たちが、戦争のときに遭難したガマ（洞窟）で日本兵に銃剣で⑩威嚇され追い出された沖縄戦の記憶を⑪ソウキしただろうことは、容易に想像できる。それらは、米軍基地が標的になると言う不安感とともに、米軍基地の警戒態勢の巻き添えにより、場合によると沖縄住民が銃口的になるのではないかとの恐怖感に重なっている。そしてそれは、「殺されたくない」という心情へつながるものである。その（１）「殺されたくない」という心情は、同じく嘉手納基地から発進した米軍爆撃機で「殺される人びと」への思いへとつながっていく。その延長線上において、米軍基地があるがゆえに、そこから発進した米軍爆撃機によって殺される人びとに対する、沖縄の私たちの想像力が問われることになる。そこには、「米軍基地の中にある沖縄」の現実があり、【 C 】逆に、生活に根ざした反戦運動や基地反対運動により、人びとを「殺したくない」ということへ結び付く回路があると言えよう。

【 D 】米軍では、空爆に誤爆は付きものであり、その誤爆の比率がときどき問題になったとしても、誤爆そのものは必要悪だと考えられている。つまり米軍は、誤爆を「戦時に避けられない犠牲」としてとらえているのだ。また米軍は今回のイラク戦争で、自国軍の死者について正確に確定し報告しているが、犠牲になったイラク市民の死亡者数やイラク兵士の死者の数字を確定する計画もないと言われている。アメリカによるアフガニスタンへの報復戦争のさい、米国のメディアでは、米軍の誤爆によって死傷したアフガニスタンの人びとの映像が映し出されたが、その映像の下の方に、この⑫惨劇はテロ事件に対する正当な報復により行なわれたというキャプションが⑬テンプレされていた。【 E 】今回のイラク戦争では、米国のメディアが、米兵の侵攻する戦闘状況は中継しても、米軍の誤爆により死傷したイラク市民の惨状はまったく言うほど報じられていなかったという。

【 F 】アフガニスタンの戦争のときには、キャプション付きでも米軍による誤爆の映像が報じられたにもかかわらず、今回のイラク戦争では、（２）アメリカのメディアに

において、その誤爆によるイラク市民の惨状はほとんど報じられることがなかったのだ。両戦争の報道において、日本のメディアも米国のメディアに大きく依存していることを考えると、あらためてメディアを批判的に読み解くことの重要性を痛感せざるをえない。

水越伸氏は、イラク戦争の報道に対して、メディアリテラシーの観点から、その報道内容を注意深く読み批判的にとらえ返すことと、「テレビや新聞が声高に語る速報性や客観性を⑭シンポウするだけではなく、情報を自分なりに消化し、一つの物語としてとらえ」ることを指摘している。そしてその物語を構築するあり方として、「自分たちにとってこの戦争が何なのか、その意味を掘り下げる」一例として「身近な高齢者の戦争観を聞いてみる」ことを提案している。その意味において、戦争報道に対して、それを批判的にとらえ返し、自分たちの生きる場から生活に根ざした別の現状認識へ広げるためにも、どのような物語を構築することができるかが問われている。それは言い換えると、生活に根ざした生きる場のリアティーに基づいて、いかに平和運動を構築していくことができるかが私たちに求められていると言えよう。

ここで、九・一一事件直後の「沖縄のリアティー」についてふれ、巨大な米軍基地のある沖縄の現実のなかで、今なおその平和運動の一つの根になっている「沖縄戦の記憶」について考えてみたい。そして、その米軍基地のなかにある沖縄のリアティーに基づきながら、戦争体験者を中心に広く共有された心情について考察してみたいと思う。その心情は、沖縄在住の歌人で沖縄戦体験者である新里スエさんが詠んだ、次の短歌に如実に表れている。

(3) 空爆のニュース日すがら流れいてむせび泣くなり沖縄の老母

「空爆」という表現からわかるように、九・一一事件そのものについて詠んだ歌ではなく、その後の十月七日のアメリカによるアフガニスタン空爆にかんして詠んだものである。九・一一事件が米軍基地のある沖縄にも大きな衝撃を与えた点は疑いないが、沖縄の多くの人びとにとってはむしろ、その後のアメリカによるアフガニスタン空爆がより多くの不安と悲しみをもって受けとめられたと言うことである。その背景には、沖縄戦の体験やその記憶、そして米軍基地のなかにある沖縄の現実が投影されている。沖縄の老母が感じたリアティーとは、九・一一事件そのものよりも、テロ事件にまったく関係のないアフガニスタンの「普通の人びと」が、米軍の誤爆によって死傷していることを伝える映像に対してであった。その老母にとっては、映像に映し出されたアフガニスタンの死傷した人びとの姿に、自らの沖縄戦の体験や記憶が重ねられているのだ。それは、(4) 近年沖縄でも沖縄戦の風化が言われて久しくなるが、それでも今なお広く共有されている心情だと言えよう。

※屋嘉比収著『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす―記憶をいかに継承するか』

(二〇〇九年、世織書房)に所収。作問にあたり一部を改変・中略した。

問一 傍線部①から⑭に、漢字はひらがなで読みをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 【A】から【F】にあてはまるものを次の中から選んで入れなさい。

【つまり さらに だからこそ しかし そして ところで】

問三 (1) ≪殺されたくない≫という心情は、同じく嘉手納基地から発進した米軍爆撃機で「殺される人びと」への思いへとつながっていくとあるが、次の(ア)～(エ)において、「殺されたくない」という根拠として筆者が指摘していることで、適当なものは「○」を、不適当なものに「×」をつけなさい。

- (ア) 根源的な人間の尊厳を守る気持ちであるから
- (イ) 戦争反対の運動を理論化することができるから
- (ウ) 日々の生活に根ざした妻／女性を鼓舞させるから
- (エ) 沖縄住民が銃口的になるという恐怖感があるから

問四 (2) 「アメリカのメディアにおいて、その誤爆によるイラク市民の惨状はほとんど報じられることがなかったのだ。」とあるが、その理由について、文章中の言葉を用いて一〇〇字程度で説明しなさい。

問五 (3) 「空爆のニュース目すら流れいてむせび泣くなり沖縄の老母」という短歌があるが、文章中の表現を用いて一〇〇字程度で内容を説明しなさい。

問六 この文章の(4)「近年沖縄でも沖縄戦の風化が言われて久しくなるが、それでも今なお広く共有されている心情」について、あなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。その際、「沖縄のリアリティー」、「普通の人びと」の二語を用いること。